

得点結果に関する考察

8月5日に東京、大阪会場で第1回の核医学認定試験が開催され、参加総数338名の受験者でした。試験問題は択一式100題、記述式6問選択4題で行われました。出題範囲としては、試験問題のガイドラインに沿って出題され専門技師としての総合的な知識と判断力を問う問題でした。特に“2つ選べ”との複数回答の問題が70%を占め、確実に理解していなければ解けない問題が多く出題されました。専門家の集団から区別するにはある程度の難易度をつけなければ区別できません。最近の国家試験問題もこの方式がとられ、理解度の正確性を問う問題が多く出題されております。

択一式は、全般的にガイドラインの各項目とも低調な正解率でした。特に大項目(6)の部分の核医学検査技術学の領域の正解率が非常に悪い結果となっております。デジタル画像、画像再構成、各種補正(散乱、減弱、分解能)及びPETは今の核医学検査にとってはなくてはならない部分ですし、当然知っておくべき知識です。自分で、なんとなく理解しているつもりでも、現象と理論とを確実に理解していないと“知っている”とは言えないこととなります。核医学を担当する放射線技師は、核医学検査の技術的知識の上に臨床的知識が存在し、それらの知識を使って検査や診断をサポートする技術集団です。もっと検査技術学の理解を深める必要があると感じました。

記述式に関しては、全体を通じてこれも択一式問題と同じことが言えますが、現象は知っているがそれがなぜ起こるかを、十分把握出来ていない。本来、現象(影響)はきちっとした根拠の上でその事項が生じているはずで、しっかりとした根拠をもって理解することが必要だと感じました。

全体を通じて、臨床的知識も当然大切ですが技術的な知識も非常に大切です。両方の知識が相まって全体の知識が向上すると考えます。合格された方も不運にも不合格になった方も今後の個々の知識の研鑽に力を注がれますよう、お願い申し上げます。

(試験問題作成委員会委員長：談話)